

8 テッポウユリ1月出しの露地栽培管理方法、資材等の整理

○ 結果の要約

- (1) 露地栽培の管理方法及び必要な資材が整理でき、施設栽培の27%のコストで生産できることが分かった。
- (2) 「スカイホルン」1月出し実証の結果、草丈、輪数、ブラスチングの発生状況で判断するとM球が露地栽培1月出しに適していることが分かった。

1 課題の背景とねらい

産地では、不安定な単価や生産コストの増加に伴い、テッポウユリの生産者、生産面積が減少している。

テッポウユリは施設栽培が一般的だが、高温期に定植しない1月以降に出荷する作型では、草丈の伸びがよい品種を用いることで露地栽培ができる可能性がある。露地栽培が可能な作型が確立できれば、他品目の生産者でも新たに施設を設置せずにテッポウユリを導入することが可能になり、生産面積の増加、産地の維持が期待できる。

昨年度、県育成品種「スカイホルン」を用いて露地栽培1月出しを実証した結果、出荷可能な切花が生産できた。今年度も継続して実証し、併せて栽培管理方法及び資材等を整理する。

2 関係機関団体との連携、役割分担等

園振協沖永良部支部花き技術部会及び和泊町、知名町技連会花き部会と連携し取り組んだ。

3 実証内容

- (1) 実証場所 和泊町喜美留 I 氏ほ場
- (2) 供試品種

品種名	球根規格	備考
スカイホルン	S	小球開花性
	M	
凧	M	対照品種、和泊町育成、低温で軸が赤くなる

- (3) 耕種概要

項目	内容
流水処理	令和3年9月17日～9月18日（1日間）
冷蔵処理	令和3年9月18日～10月23日（35日間）
定植	令和3年10月23日
施肥(kg/10a)	オール14 基肥50kg 追肥12kg (N:P:K=8.7:8.7:8.7)
作式	13cm×10目ネット 6条植え

4 結果及び考察

- (1) 1月出しの露地栽培管理方法

かん水回数は天候で左右されるため、定期的な土壌の観察が必要であった。

施設栽培では葉枯病の予防散布が通常1～2回必要であり、被覆のない露地栽培では施設栽培以上の防除が必要であると想定していたが、今回の実証では無防除で栽培できた。

葉枯病は継続した過湿で助長されるが、露地栽培はビニール被覆がなく風通しがよかったので、無防除で栽培できたと考えられる。しかし、実証ほ場は風通しのよい場所であったため、防除回数に関しては今後検討する必要がある。

表1 1月出しの露地栽培管理内容

項目	内容
かん水回数	3～4回/月
防除	アドマイヤー1粒剤 1回



写真1 露地栽培ほ場

(2) 露地栽培資材

露地栽培に必要な資材を整理した結果、施設栽培の27%のコストで生産できることが分かった。

表2 10a 当たりの資材一覧

項目	内容	
鉄筋支柱	2.4m 間隔	463本
スプリンクラー	2 m 間隔・1 条・3 畝	93本
防風ネット	5 m 間隔仕切り	350m
支柱・ビニペット	3 m 間隔	120本

表3 10a 当たりの露地栽培・施設栽培の資材等のコスト比較

露地栽培		施設栽培	
鉄筋支柱	5,731円	ビニールハウス	241,582円
スプリンクラー	1,667円	寒冷紗	26,280円
防風ネット	9,023円	かん水施設	17,920円
支柱	56,472円		
ビニペット	5,244円		
スプリング			
合計	78,137円	合計	285,152円

※ビニールハウス、スプリンクラー、かん水施設は年償却額で試算

(3) 露地栽培1月出しの収穫調査結果

収穫日は、「スカイホルン」S球、M球ともに1月14日であった。「凜」M球は4日ほど遅れて1月18日であった。

草丈は、「凜」M球が108.9cmで最も高く、次いで「スカイホルン」M球の96.3cm、「スカイホルン」S球の84.5cmであり、S球は出荷規格(2L, 85cm)を満たすにはやや短かった。

最も輪数が多かったのは「スカイホルン」M球であり、次いで「凜」M球、「スカイホルン」S球の順であった。2次花はなく、ブラスチングは「スカイホルン」M球は発生はなく、「スカイホルン」S球、「凜」M球は若干発生していた。

草丈、輪数、ブラスチングの発生状況で判断すると「スカイホルン」M球が1月出しに適していると考えられる。「スカイホルン」の特性は小球開花性であるが、露地栽培1月出しでは草丈確保のため対照品種と同等の規格の球根が必要であった。

表4 露地栽培1月出しの収穫調査

品 種 名	球根規格	収穫日 (最盛)	草丈 (cm)	花数(輪)		ブラスチング率 (%)
				1次	2次	
スカイホルン	S	1月14日	84.5	3.2	0	1.7
スカイホルン	M	1月14日	96.3	4.9	0	0
凜	M	1月18日	108.9	3.9	0	1.9

(4) まとめ

露地栽培の管理方法及び必要な資材を整理した。施設栽培の27%のコストで生産できることが分かった。前年度に引き続き、今回の実証でも葉枯病の発生がなかった。ビニール被覆がなく風通しがよかった環境によるものと考えられるが、栽培マニュアルでは、予防散布は行うよう記載する。

「スカイホルン」1月出し実証の結果、草丈、輪数、ブラスチングの発生状況で判断するとM球が露地栽培1月出しに適していると考えられる。



写真 2 「スカイホルン」 S 球



「スカイホルン」 M 球



「凜」 M 球

5 残された課題と対応
露地栽培マニュアル作成

6 執筆者 本山 美月